

反ナチ抵抗運動グループ「白バラ」のビラの鑑定をめぐって  
—「人文科学的調査」の結果の考察と計量文献学的分析の試み—

阿 部 美 規

富山大学人文学部紀要第74号抜刷

2021年2月

# 反ナチ抵抗運動グループ「白バラ」のビラの鑑定をめぐって —「人文科学的調査」の結果の考察と計量文献学的分析の試み—<sup>1)</sup>

阿 部 美 規

## 1. はじめに

1942年6月、第二次世界大戦下のドイツ・ミュンヘンでは、市民のもとに郵送で怪文書が届き始めていた。その文書を受け取った者の中には、当局に届け出たり、内容を一瞥して所持していること自体が危険な文書であると判断して破棄したりする者も少なくなかった。しかしその一方で、郵送で受け取った人によって読まれただけでなく、その後「手から手へ」と渡り、複数の人によって回覧されたものもあった。<sup>2)</sup>

『「白バラ」のビラ第1号』（Flugblätter der Weissen Rose I）と題されたこの文書は、ナチの犯罪を暴き、ナチに対する「消極的抵抗」<sup>3)</sup>を呼びかけるものであった。「ビラ」を表す語 Flugblätter が複数形であること、またビラのタイトルに含まれたローマ数字 I が示唆する通り、「白バラ」のビラはその後、翌1943年の2月までの約8か月の期間に、第6号まで作成・頒布された。<sup>4)</sup>

後にナチの民族裁判所で、「利敵行為」および「国防力破壊工作」のかどで裁きを受けることになる、この—反ナチのビラを作成し巷間に広めるとい—「大罪」を犯した「白バラ」とは誰なのか。ナチの国家秘密警察ゲシュタポは、それまでとは桁違いの印刷枚数で、複数の主要都市において第5号ビラが頒布された後、その捜査の手を一層強め、ビラの作成に使用されたタイプライターの特定をしたり、ビラに使用された紙の販売元を突き止めるなどの一般的な犯罪捜査と並行して、古文献学（Altphilologie）を専門とする研究者に「白バラ」のビラを鑑定し、ビラを作成・頒布した「犯人」に繋がる有力な情報を提供するよう要請するに至って

---

1) 本稿は、日本独文学会北陸支部研究発表会（2019年11月16日、於：富山大学）で行った口頭発表「犯罪捜査の言語学。『白バラ』のビラの鑑定をめぐって」の内容を加筆修正したものである。

2) Scholl (2016:39): Flugblätter wurden von Hand zu Hand gereicht, [...].

3) ドイツ語原語は passiver Widerstand。武器をとってナチと戦う積極的抵抗ではなく、軍需品生産工場でのサボタージュやナチの催す集会・イベントなどへの不参加という形をとった、誰にでも可能な抵抗を「白バラ」は「消極的抵抗」と呼んでいる。

4) 「白バラ」のビラは第4号まではその発行主体「白バラ」とローマ数字による号数が明示されているが、続く5番目および6番目のビラには発行主体も号数を表す数字も記されていない。しかし今日では、いずれのビラも「白バラ」により作成されたものであり、それら号数を示す数字のないビラの順も明らかになっている。端的に示すためにも本稿では以下、「第5号ビラ」、「第6号ビラ」という表現を用いる。

いる。<sup>5)</sup>

果たしてこの古文献学者はゲシュタポの要請に二度に亘って応じ、2通の鑑定書を提出しているのであるが、それはどのような内容のものであったのか。すなわち、彼は「白バラ」のビラをどのように読み解き、いかなる「犯人」像を描いて見せたのか。そしてその「犯人」像は正しかったのか。まずはこれらの点を明らかにすることを本稿の前半で試みたい。そして後半では、今日の犯罪捜査で一般的な犯罪者プロファイリングにも活用される計量文献学的な手法を用いて「白バラ」のビラの分析を行い、その有効性や限界について検討を加えることとする。<sup>6)</sup>

## 2. 「白バラ」とそのビラについて

1943年2月18日、ミュンヘン大学構内において「白バラ」の第6号ビラを撒いているところを大学用務員に目撃され、取り押さえられたハンス・ショル (Hans Scholl, 1918-1943) とゾフィー・ショル (Sophie Scholl, 1921-1943) のショル兄妹の逮捕を契機に、その後次々と反ナチ抵抗運動グループ「白バラ」の中心メンバーが明らかとなった。ショル兄妹の2名に、クリストフ・プロープスト (Christoph Probst, 1919-1943)、アレクサンダー・シュモレル (Alexander Schmorell, 1917-1943)、ヴェリリー・グラーフ (Willi Graf, 1918-1943) の3名を加えたミュンヘン大学の学生5名と、ミュンヘン大学の心理学・哲学教授のクルト・フーバー (Kurt Huber, 1893-1943) の計6名がそれである。学生メンバーたちは、ビラの作成・頒布の他、ミュンヘン市街地で「自由」や「打倒ヒトラー」<sup>7)</sup>などのスローガンのペイントも行っている。

「白バラ」の作成したビラの文章は、第1号から第5号までは学生であるハンス・ショルとアレクサンダー・シュモレルによって、第6号ビラのみはフーバー教授によって執筆されたことが今日では判明している。いずれのビラも、タイプライターで作成された原本から、謄写機を使用して、ドイツ工業規格 (DIN) のA4サイズ of 用紙1枚の両面 (第1号～第5号ビラ) もしくは片面 (第6号ビラ) に印刷されている。<sup>8)</sup> 各号のビラの印刷枚数、頒布地域・時期は表1 (次ページ) に示す通りである。

第4号までのビラと異なり、第5号および第6号ビラではその印刷枚数が格段に増えていることが表から見て取れる。Breinersdorfer (Hrsg.) (2006) によると、「白バラ」の学生メンバーたちが第4号ビラまでの作成者であることをフーバー教授に初めて打ち明け、「白バラ」の活動

5) Schott (2008:450): Im Februar 1943, [...] erreichte ihn die Aufforderung der Gestapo, die Flugblätter der Weissen Rose zu begutachten.

6) 財津 (2017:46)

7) ドイツ語の原語はそれぞれ、Freiheit と Nieder mit Hitler である。

8) 「白バラ」のビラは、ドイツ連邦政治教育センター (Bundeszentrale für politische Bildung) のウェブサイト (URL: <http://www.bpb.de/>) で実物の写し (PDF ファイル) をダウンロードできる。

表 1. 「白バラ」のビラの印刷枚数、頒布地域・時期<sup>9)</sup>

	印刷枚数	頒布地域	頒布時期
第1号ビラ	約100枚	ミュンヘン	1942年6月27日～7月12日
第2号ビラ	約100枚	ミュンヘン	1942年6月27日～7月12日
第3号ビラ	約100枚	ミュンヘン	1942年6月27日～7月12日
第4号ビラ	約100枚	ミュンヘン	1942年7月11日～7月20日
第5号ビラ	1万～1万2000枚	ミュンヘン、シュトゥットガルト、アウクスブルク、フランクフルト、ウィーン、ザルツブルク、リンツ	1943年1月25日～2月18日
第6号ビラ	約3000枚	ミュンヘン	1943年2月15日～2月18日

への協力を依頼したのが1942年のクリスマスまで数日という時期であった。<sup>10)</sup> このこと、およびこの約2か月後にフーバー自身が第6号ビラの草稿を執筆していることに鑑みれば、戦時下、物資が枯渇する中で、第5号および第6号ビラの印刷用紙調達に「教授」としてのフーバーの協力があったと見て間違いはない。

### 3. 古文献学者によるビラの鑑定

#### 3.1. リヒャルト・ハルダーについて

「はじめに」で記した通り、ゲシュタポの要請を受けて「白バラ」のビラの鑑定を行ったのは古文献学者である。その古文献学者の名はリヒャルト・ハルダー (Richard Harder, 1896-1957)、「白バラ」の第6号ビラを起草したフーバー教授と同じミュンヘン大学の教授で、古文献学の中でもギリシアの碑銘・文化史研究 (griechische Epigraphik und Kulturgeschichte) を専門とし、古代ローマの哲学者プロティノス (Plotin) の著作の翻訳も手掛けている。<sup>11)</sup>

犯罪捜査の特別な訓練を受けた経験豊富な専門家や犯罪心理学者ではなく、犯罪捜査とはおよそ縁遠い古文献学のような分野を専門とする大学教授にゲシュタポはなぜ白羽の矢を立てたのか、この人選は一見奇異な印象を与える。しかしながら、ハルダーがナチ党高官養成のためのナチの新しい大学 (Hohe Schule) のインド・ゲルマン精神史研究所 (Institut für

9) Chaussy/Ueberschär (2013:26ff.)

10) Breinersdorfer (Hrsg.) (2006:128): Erst in den Tagen vor Weihnachten geben die Studenten ihre Deckung auf. Sie offenbaren, die Verfasser der Flugblätter zu sein, [...]. Sie wollen ihn, den sie als erbitterten Gegner der Nazis kennen gelernt haben, schon lange für die Mitarbeit in der *Weißten Rose* gewinnen.

11) Schott (2008), Killy/Vierhaus (2001:384)

indogermanische Geistesgeschichte) の所長に内定していたこと、すなわちいわゆる御用学者であったこと、<sup>12)</sup> および、「白バラ」のビラが、突き詰めて言えばヒトラーおよびナチズムを告発する内容を持つ政治ビラであったにせよ、「高邁で読み手も限定された内容」<sup>13)</sup> を持つものであり、その中で、必ずしも広く読まれているとは言えない古今の難解な著作から時に膨大な引用<sup>14)</sup> がなされていること、つまりその精確な読解には人文科学のきわめて高い見識が必要であることに鑑みれば、それも驚くに値しない。

### 3.2. ビラの鑑定所見：「犯人」像とその根拠

鑑定のためのビラをハルダーが受け取ったのは、1943年2月17日のことである。この時ハルダーに引き渡されたのは、直近に多くの枚数で頒布された「白バラ」の第5号ビラと第6号ビラの2通のみであった。「ドイツ抵抗運動のビラ」<sup>15)</sup> と題され、総語数456語でまとめられた第5号ビラと、「女子学友諸君！男子学友諸君！」<sup>16)</sup> の呼びかけで始まり、552語からなる第6号ビラを数時間かけて鑑定した後、ハルダーはその所見を5枚の用紙にまとめている。<sup>17)</sup> 冒頭で「人文科学的調査」が明らかにし得たことと断った上で、推論の根拠となった語や表現などが各ビラの何行目に使用されているのか、その箇所を詳細に列挙しつつ縷々述べた鑑定書の中でハルダーが描いたのは、次のような「犯人」像であった。<sup>18)</sup> すなわち、ビラの執筆者は「ドイツ人」<sup>19)</sup> であり、かつ「才能ある知識人」<sup>20)</sup>、そしてその職業は「人文科学の研究者かプロテ

---

12) まさにこの故にハルダーは戦後教授資格を失っている（1952年に回復）。ナチ政権に協力したことに彼は後年罪悪感を感じていた。Vgl. Killy/Vierhaus (2001:384): 1945 verlor er die Lehrbefugnis. H(arder). empfand sein Paktieren mit dem nationalsozialistischen Regime als Schuld. Er wurde 1952 an die Univ(ersität). Münster wieder berufen, wo er bis zu seinem Tode lehrte.

13) 對馬 (2015:78)

14) 第1号ビラでは、シラーが行った大学講義『リュクルゴスとソロンの立法』とゲーテ『エピメニデスの目覚め』から、第2号ビラでは、老子『老子道德経』から、第3号ビラではキケロの『法律について』、およびアリストテレスの『政治学』から、第4号ビラでは旧約聖書『伝道者の書』とノヴァーリス『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』から、第6号ビラではドイツの愛国詩人テオドール・ケルナーの詩から、引用の目的や引用文の出典における位置・文脈等を述べることなく、時に373語に及ぶ引用が行われている。Vgl. 阿部 (2018)

15) Flugblätter der Widerstandsbewegung in Deutschland

16) Kommilitoninnen! Kommilitonen!

17) 本稿では Schott (2008) に付録として取められた鑑定書を資料とした。

18) 鑑定書は次のように始まる：Vor einigen Stunden wurden mir zwei Flugblätter übergeben. Im Interesse der Beschleunigung der Untersuchung stelle ich sofort zusammen, was eine geisteswissenschaftliche Überprüfung in der Kürze der Zeit ergeben konnte.

19) Schott (2008:486): Er ist Deutscher.

20) Schott (2008:489): Zusammenfassend stellt sich der Verfasser als ein begabter Intellektueller dar, [...].

スタントの神学者」<sup>21)</sup>、もしくは「助手かそれに類する者」<sup>22)</sup>であり、「現時点で兵士ではないし、また過去にその経験もない」。<sup>23)</sup> またハルダーによれば、「第5号ビラと第6号ビラは同じ執筆者によって書かれたものである」。<sup>24)</sup>

このような人物像の直接的な根拠となったのは、ビラの全体に亘って用いられている洗練された文章や、ビラ的那ここに現れるルター訳聖書からのものと思われる、部分的には擬古的な表現である。<sup>25)</sup> また、ビラの執筆者を研究者ないし助手など大学関係者とハルダーが推定したのは、第6号ビラにおいて、新聞などで報道されておらず、それゆえ大学関係者しか知り得ないミュンヘン大学創立470周年記念式典での椿事<sup>26)</sup>に正確に言及されていたり、一般の人々が知り得ないミュンヘン大学学長ヴァルター・ヴュスト (Walther Wüst, 1901-1993) のナチ党組織における階級<sup>27)</sup>が正しく記されていたりしたからである。

第5号ビラと第6号ビラの執筆者を同一人物と判断した根拠としてハルダーは、両ビラで共通して使用されているキーワードや準え (Parallele) を挙げている。わずか552語を用いて書かれた第6号ビラ中に8回も登場する Freiheit 「自由」という語、特に persönliche Freiheit 「個人的な自由」という表現に着目したハルダーは、この語が2回しか使用されない第5号ビラにおいても、第6号ビラにおけるのと同様、この語が「各個人の自由」を指して使われている、すなわちまったく同じ文脈で使用されていることを指摘する。<sup>28)</sup>

準えについては、第5号ビラ24行目の「新たな解放戦争が始まろうとしている」<sup>29)</sup>という表現にハルダーは注目している。ここに用いられている Befreiungskrieg という語は、通常は普通名詞として「民族解放のための戦争」を意味するのであるが、ここでは歴史学における意味で、

---

21) Schott (2008:487): [...] entweder ein Geisteswissenschaftlicher (sic!) oder ein Theologe. [...] Dies innere Vertrautsein mit der Sprache der Bibel deutet [...] eher auf einen Protestanten als auf einen Katholiken [...].

22) Schott (2008:487): Assistent oder dgl.

23) Schott (2008:489): Übrigens glaube ich nach der gesamten Ausdrucksweise nicht, dass der Verfasser Soldat gewesen ist oder ist.

24) Schott (2008:486): a und b stammen von dem gleichen Verfasser. (aは第5号ビラを、bは第6号ビラを表している)

25) 関係代名詞として用いられた so にハルダーは言及している。Vgl. Schott (2008:487)

26) 1943年1月13日に開催されたミュンヘン大学創立470年を祝う式典で、大管区指導者パウル・ギースラー (Paul Giesler) がスピーチの際、女子学生たちを侮辱する発言をし、これに抗議した女子学生を取り押さえようとしたナチ党員たちと、女子学生を守ろうとした男子学生たちとがもみ合いになり、多くの学生が逮捕されるに至った。

27) 親衛隊上級指揮官 (SS-Oberführer)

28) Schott (2008:486): das Stichwort »Freiheit« kehrt a53 wieder und zwar fällt der Blick bei diesem Freiheitswillen typisch auf »jeden Einzelnen«. (a53は、第5号ビラの53行目を表す)

29) Ein neuer Befreiungskrieg bricht an.

すなわち「1813年から15年にかけて行われたドイツの対ナポレオン戦争」を指して用いられているというのである。つまりハルダーによれば第5号ビラのこの箇所は、当時のドイツ諸邦の大部分に当たる地域を服属させ、自らの保護下に置いた後、ロシアに遠征して敗走を余儀なくされたナポレオンに、同じくドイツを支配した後に戦争を引き起こし、東部戦線でソ連に決定的な大敗を喫したヒトラーを見立て、ヒトラーに対する「新たな解放戦争」でも、130年前の対ナポレオン解放戦争のときと同様、勝利しようではないかとビラの読者に訴え、読者を鼓舞している箇所と捉えることができる。

この準えに通じる文章は、ハルダーの指摘通り、第6号ビラの50行目以降に確認できる。当該箇所を訳出すれば次のようになる。

(1) 女子学生諸君！男子学生諸君！ドイツ国民の目は我々に向けられている。ドイツ国民は、1813年にナポレオンを打ち倒したときと同様、1943年の今、精神の力でナチのテロを打倒することを我々に期待しているのだ。／ 東方のベレジナとスターリングラードでは火の手が上がっている。スターリングラードの死者たちが我々に哀願しているのだ。／ 「立ち上がれ、わが民よ、狼煙は上がっている」<sup>30)</sup>

ハルダーが第5号・第6号ビラを受け取り、即座に鑑定をして、そこに描かれる「犯人」像とその根拠をおおよそ上のように要約できる所見をまとめ提出したその翌日（1943年2月18日）、彼は再度、ビラの鑑定を要請されている。この二度目の要請に応じてハルダーは、「白バラ」の残りのビラ、すなわち第1号から第4号までのビラの鑑定を行い、その所見も早々にまとめ同日付で提出している。ハルダーによれば、新たに第1号から第4号までのビラを鑑定することで、前日の自らの観察が新たな解明を得、あわせて前日の自らの分析結果が正しかったことが証明されたという。<sup>31)</sup> 事実、ハルダーはこの二度目の鑑定の所見を述べた4枚からなる文書

---

30) ドイツ語原文は次の通り：Studentinnen! Studenten! Auf uns sieht das sieht (sic!) das deutsche Volk! Von uns erwartet es, wie 1813 die Brechung des Napoleonischen, so 1943 die Brechung des nationalsozialistischen Terrors aus der Macht des Geistes. / Beresina und Stalingrad flammen im Osten auf, die Toten von Stalingrad beschwören uns! / „Frisch auf, mein Volk, die Flammenzeichen rauchen!“ この文における Beresina は、ロシアからの退却の途上、ナポレオン軍が渡河しようとした際にロシア軍に追撃され壊滅的な打撃を受けたベレジナ川を指す。また最後の引用符内の文言は、ドイツの愛国詩人で、対ナポレオン解放戦争に義勇兵として参加し斃れたテオドール・ケルナー（Theodor Körner, 1791-1813）の詩から引かれたものである。

31) Schott (2008:490): Durch diese (sic!) Moment erhalten meine gestrigen Beobachtungen eine neue Beleuchtung. Zunächst einmal bestätigt sich das Ergebnis der gestrigen Analyse von a b, indem in c-f Motive deutlich herauskommen, die in a b nur dem geschulten Ohr hörbar wurden. ここでも a は第5号ビラを、b は第6号ビラを表す。また c-f は第1号から第4号までのビラを指している。

の約半分を、ビラに現れるキリスト教関連の語句、および、ビラの書き手が知識人階層に属することの証拠を列挙することに費やし、<sup>32)</sup> 残り半分の紙幅は、ビラ執筆者の思想的背景・基盤への推論、および全6通のビラを分析することで見て取れるビラ執筆者の政略的な変化 (eine Art von politischer Biographie) を述べることなどに充てており、前日の鑑定書で自ら描いた「犯人」像への変更・訂正は一切行っていない。

### 3.3. 鑑定所見の当否

ハルダーは二度に亘ってビラを鑑定し、ビラを執筆したのは、知識人であり、大学およびキリスト教の関係者であるという「犯人」像を焙り出した。第1号から第5号までのビラを執筆したのがミュンヘン大学の医学生ハンス・ショルとアレクサンダー・シュモレルであること、第6号ビラを書いたのが心理学・哲学を専門とする同大学のクルト・フーバー教授であったことに鑑みれば、ハルダーの「人文科学的調査」は大筋では正しく、「犯人」の絞り込みには一定の貢献をするものと見なすことができる。

しかし他方で、ハルダーの鑑定は細かな点では必ずしも事実と合致していない。上で述べた通り、ハルダーはビラ執筆者がルター訳聖書に見られる文言や擬古的表現を多用していることから、ビラ執筆者が神学者である可能性にも言及しているが、これはまったく当たらない。宗派にしても、ハルダーが想定したプロテスタントを信仰しているのはハンス・ショルのみで、ビラ執筆に関わった他の2名、すなわちアレクサンダー・シュモレルとクルト・フーバーはそれぞれ、ギリシア正教とカトリックの信者であると申告している。<sup>33)</sup>

またハルダーは、第5号ビラの中にビラ執筆者が兵士に配慮する表現を見出しているにも拘わらず、「ビラの書き手は兵士ではないし、そうであった過去もない」と断じているが、これも事実とは異なる。ハンス・ショルとアレクサンダー・シュモレルは医学生であると同時に国防軍軍曹 (Feldwebel) でもあり、東西両戦線に衛生兵として派遣されるなど実際の軍務の経験もある。

前節までに述べた上記の点のほか、ハルダーはビラ執筆者の年齢について、第6号ビラの記事スタイル (Ton) を根拠に「おおよそ1933年ごろに大学での勉学を始めた人間」と推測しているが、<sup>34)</sup> 当該ビラを執筆したクルト・フーバーがミュンヘン大学での勉学を開始したのは

---

32) Schott (2008:490): Gestr(iges). Gut(achten). S. 3 Nr. 4 christliche Färbung: dies kommt jetzt in voller Breite zu Tage.[...] Ich bezeichnete den Verfasser als Intellektuellen. Das kommt in dem neuen Material wieder deutlich heraus.

33) Chaussy/Ueberschär (2013:343, 453) に掲載されたこの2名のゲシュタポ尋問調書には、それぞれ griech-orth. と kath. と記されている。

34) Schott (2008:487): ich schliesse auf einen Menschen, dessen Studium etwa um 1933 begann [...].



1912年のことである。「犯人」の年齢に関しては20歳以上も推測を誤っていることになる。

以上の不一致は、ハルダーが詳細に過ぎる推測をしたことに起因するものであって、殊更に指摘するまでもないことかもしれない。しかしハルダーの鑑定書には看過できない大きな誤りも含まれている。それは、第5号ビラと第6号ビラは同じ書き手による、としたことである。再三述べている通り、第5号（までの）ビラは学生たちによって、そして第6号ビラだけは年齢も立場もまったく異なるフーバー教授によって書かれたものである。なぜこのような誤った判断にハルダーは思い至ったのか。記述内容や文章に類出するキーワードやモチーフなどだけに注目して文書の書き手を論じることの難しさ、ないしそうせざるを得ない「人文科学的調査」の限界がここに示されていると言える。

#### 4. 計量文献学的調査の試み

計量文献学とは、「文献に関する諸問題を、従来の人文諸科学における、記述内容・文意の検討や、成立に関する歴史的事実の考証という研究方法とは観点を異にし、文献における単語や品詞の出現率、単語や文の長さの平均値、文献の語彙量などの文章の数量的な特徴を、[中略]統計的手法で把握することで解明しようとする研究分野」である。<sup>35)</sup> 文章の数量的研究の発端は19世紀中ごろに遡るが、その後、特に20世紀の後半以降は、コンピュータを用いた大量のデータの分析が可能となり、これまでにこの研究手法を用いて、著者に関して疑問が持たれている文書や、作者不詳の文学作品などの書き手の推定が種々行われてきている。<sup>36)</sup>

以下本章では、この計量文献学的手法を用いて「白バラ」のビラを分析し、その結果に基づいて当該研究手法の有効性や問題点について述べたい。

##### 4.1. 文の長さの平均値

「白バラ」の各ビラの総語数<sup>37)</sup>と文の総数をそれぞれ実数で、そして前者を後者で除して求めた各ビラの1文の平均的な長さ（平均文長）を語数で表したのが表2（次ページ）である。

---

35) 村上 / 土山 / 金 / 上阪 (2016:8)

36) 村上 / 土山 / 金 / 上阪 (2016:8ff.)

37) 第5号ビラ以外では様々な文献から引用が行われているが、その語数はカウントしていない。

表 2. 各ビラの総語数、文の数、および 1 文の平均的な長さ

	第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号	第 5 号	第 6 号
総語数	419	908	937	789	456	545
文の数	12	33	45	34	41	38
平均文長	34.9	27.5	20.8	23.2	11.1	14.3

表を一瞥して明らかな通り、第 5 号ビラおよび第 6 号ビラにおける文の短さが際立っている。

#### 4.2. 文構造の複雑さ

各ビラの文章に使用されている個々の文を、(a) 1 つの主文のみからなる単一文、(b) 2 つ以上の並列された主文からなる対結文、(c) 1 つの主文と 1 つ以上の副文からなる付結文、の 3 種に分類し、それぞれの実数と割合を示したのが表 3 である。

表 3. ビラの文の構造別分類<sup>38)</sup>

	第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号	第 5 号	第 6 号
単一文	2 (17%)	8 (24%)	15 (33%)	8 (24%)	21 (55%)	18 (56%)
対結文	2 (17%)	6 (18%)	7 (16%)	5 (15%)	4 (11%)	4 (13%)
付結文	8 (67%)	19 (58%)	23 (51%)	21 (62%)	13 (34%)	10 (31%)

ここでも第 1 号から第 4 号までのビラと、第 5 号・第 6 号ビラとの間に明確なコントラストが見て取れる。すなわち、第 1 号から第 4 号まででは、より複雑な構造を持つ付結文がいずれにおいてもすべての文の半分以上を占めるのに対し、第 5 号・第 6 号ビラでは、付結文の割合は全体の 3 分の 1 程度であって、その代わりに最もシンプルな構造の単一文がそれぞれ 55%、56% と、全文の半数以上を占めている。

下の (2) は第 1 号ビラに見られる付結文の例である。この文は第 1 号ビラ中で最長の文でもあり、また副文の従属度は 3 を数える。<sup>39)</sup>

(2) Wenn das deutsche Volk schon so in seinem tiefsten Wesen korrumpiert und zerfallen ist, dass

38) 第 5 号ビラおよび第 6 号ビラの一項文や定動詞を欠く文相当句は除外した。

39) 因みに、各ビラ最長の文の語数は次の通り。第 1 号:92 語、第 2 号:66 語、第 3 号:53 語、第 4 号:102 語、第 5 号:29 語、第 6 号:34 語。また、従属度 2 以上の複雑な構造は第 1 号から第 4 号では満遍なく見られ、合計で 20 例を数えるが、第 5 号ビラでは皆無であり、また第 6 号ビラではわずか 1 例のみが見られるに過ぎない。

es, ohne eine Hand zu regen, im leichtsinnigen Vertrauen auf eine fragwürdige Gesetzmässigkeit der Geschichte das Höchste, das ein Mensch besitzt und das ihn über jede andere Kreatur erhöht, nämlich den freien Willen, preisgibt, die Freiheit des Menschen preisgibt, selbst mit einzugreifen in das Rad der Geschichte und es seiner vernünftigen Entscheidung unterzuordnen – wenn die Deutschen, so jeder Individualität bar, schon so sehr zur geistlosen und feigen Masse geworden sind, dann, ja dann verdienen sie den Untergang.<sup>40)</sup>

#### 4.3. 語彙の豊富さ・多彩さ

文章の総語数に占める異なり語数の比率 TTR (type-token ratio) は、書き手の語彙の豊富さを示す。すなわち、この値が高ければ高いほどその書き手の語彙が豊富であり、また表現が多彩であるということになる。TTR も書き手の特徴をなすものと考えられる。<sup>41)</sup> 表 2 ですで見たとおり、本稿で調査対象としているピラの総語数は、最も少ない第 1 号ピラで 419 語、最も多い第 3 号ピラでは 937 語であり、倍以上の開きがある。「一人の人間の有する語彙の数は有限であるため、同じ著者の書いた文献でも延べ語数が大きくなると。当然 TTR の値は減少していく」<sup>42)</sup> という点を考慮し、各ピラの冒頭 300 語を対象に TTR をまとめたのが表 4 である。

表 4. 各ピラ冒頭 300 語の TTR

	第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号	第 5 号	第 6 号
異なり語数 (V(N))	194	194	189	199	201	202
TTR (V(N)/300)	0.647	0.647	0.630	0.663	0.670	0.673

いずれも 0.6 を超える比較的高い値となっている。学生が書いた第 1 号から第 5 号までのピラとフーバー教授による第 6 号ピラの間にも TTR の明確な差は認められない。

次に、同じく各ピラの語彙の豊富さ・多彩さを客観的に示すこと目的に、各ピラの引用を除く全文を対象に、使用頻度の高い語形を上位 20 位までまとめた。表 5 (次ページ) がその結果である。

40) 日本語訳は次のようになろう。「もしもドイツ国民が、その最も深い本質において腐敗し墮落してしまっていて、自ら行動することなく、歴史の法則性という怪しげなものに軽率にも信頼を寄せ、人間が所有し、人間を他のあらゆる創造物の上に高らしめる最高のもの、すなわち自由意志を放棄し、自ら歴史の歯車に介入して、それを自分の理性的な決断に従わせるという人間の自由を放棄するならば、一ままたもドイツ人があらゆる個性を欠いてしまっていて、魂を持たない臆病な群衆に成り下がってしまっているとするならば、そうであるなら、本当にそうであるならば、ドイツ人は滅亡するにふさわしい」。

41) 村上 / 土山 / 金 / 上阪 (2016:70)

42) 村上 / 土山 / 金 / 上阪 (2016:23)

表 5. 各ピラにおける使用頻度上位 20 語形

	第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号	第 5 号	第 6 号
1	und (18)	die (20)	der (32)	die (31)	der (13)	und (24)
2	das (11)	und (19)	die (29)	der (28)	die (12)	die (20)
3	der (11)	es (18)	und (26)	und (21)	und (8)	der (13)
4	die (11)	zu (18)	in (15)	den (18)	auf (7)	den (10)
5	es (8)	in (17)	nicht (14)	in (13)	das (6)	uns (10)
6	den (7)	sich (17)	ist (12)	ist (13)	den (6)	das (8)
7	in (7)	der (15)	den (11)	er (11)	in (6)	in (8)
8	ist (6)	ist (15)	zu (11)	ein (10)	nicht (6)	deutschen (7)
9	so (6)	nicht (14)	für (10)	zu (10)	des (5)	Ehre (7)
10	als (5)	diese (12)	werden (10)	auf (9)	hat (5)	Freiheit (7)
11	des (5)	das (11)	das (8)	dass (9)	werden (5)	haben (7)
12	sich (5)	ein (11)	des (8)	des (9)	dem (4)	im (7)
13	von (5)	er (10)	muss (8)	nicht (9)	ein (4)	Volk (6)
14	zu (5)	wenn (9)	nur (8)	dem (8)	Euch (4)	von (6)
15	ein (4)	so (8)	dass (7)	mit (7)	Europa (4)	wir (6)
16	jeder (4)	dass (7)	einen (7)	muss (7)	Ihr (4)	zu (6)
17	dann (3)	dem (7)	allen (6)	aber (6)	im (4)	des (5)
18	dass (3)	des (7)	dem (6)	das (6)	kann (4)	deutsche (5)
19	dieser (3)	mit (7)	ein (6)	Hitler (6)	mit (4)	einem (4)
20	ehe (3)	noch (7)	es (6)	es (5)	muss (4)	es (4)

表の各セルのカッコ内には、当該語形がそのピラで使用されている回数を実数で示されている。例えば、第 1 号ピラでは und 「そして」という語は 18 回使用されており、第 1 号ピラにおける最も登場回数の多い語ということになる。

表 5 からは、いずれのピラにおいても冠詞や接続詞、代名詞や前置詞のような専ら文法的な機能を果たすいわゆる機能語が上位を占めていることが見て取れる。

少し古い資料にはなるが、1900 年ごろのドイツ語の書きことばのコーパス（規模 1100 万語）を用いたドイツ語語彙の頻度調査では、上位 20 語は次の順であったと König (1994) は紹介している。1. die, 2. der, 3. und, 4. in, 5. zu, 6. den, 7. das, 8. nicht, 9. von, 10. sie, 11. ist, 12. des, 13. sich, 14. mit, 15. dem, 16. dass, 17. er, 18. es, 19. ein, 20. ich<sup>43)</sup>

また、コーパスの規模は半分以下となるが、420 万語を擁する現代ドイツ語のコーパスを用いて語彙頻度を調べた Jones/Tschirner (2006) は、上位 20 位までの語彙を次のように挙げてい

43) König (1994:114)

る。1. der/die/das, 2. und, 3. sein (v), 4. in, 5. ein, 6. zu, 7. haben, 8. ich, 9. werden, 10. sie, 11. von, 12. nicht, 13. mit, 14. es, 15. sich, 16. auch, 17. auf, 18. für, 19. an, 20. er<sup>44)</sup>

Königの掲げるリスト, Jones/Tschirnerの掲げるリスト, そのどちらにおいても, 使用頻度上位20位までに入るのは機能語がほとんどである。内容語は前者では, 8位の副詞 nicht「～ない」と11位の動詞 ist「～である」の2語のみ, 後者のリストでは少し増えているとはいえそれでも, 3位に動詞 sein「～である」, 7位に動詞 haben「持っている」, 9位に動詞 werden「～になる」, 12位に副詞 nicht「～ない」, 16位に副詞 auch「～もまた」, の計5語が入っているのみである。後者のリストで内容語が増えたと言っても, 動詞がわずかに3語, しかもいずれもごく基本的な意味を表すものだけに限定されている。一見して明らかな通り, このリストの中には名詞や形容詞などの内容語は一切含まれていない。<sup>45)</sup>

一般的なドイツ語におけるこのような語彙頻度を概観した上で再度表5を眺めてみると, 第1号から第5号までのビラの使用頻度上位20語は, KönigおよびJones/Tschirnerの示すそれと大差ないことがわかる。第1号および第2号ビラでは内容語は8位の ist「～である」のみ, 第3号ビラでは ist「～である」(6位)と werden「～になる」(10位), 第4号ビラでは6位に ist「～である」が, そして19位に名詞 Hitlerがあるのみである。内容語に乏しいというこの状況は第5号ビラでも変わらない。ここでも10位に動詞 hat「持っている」, 11位に動詞 werden「～になる」が位置し, 15位に名詞 Europaが1語入っているだけである。

これに対し, 第6号ビラでは明らかに様相が異なる。第6号ビラでは語彙頻度上位20位までに, 名詞が3語(9位 Ehre「名誉」, 10位 Freiheit「自由」, 13位 Volk「国民」), 動詞が1語(11位 haben「持っている」), そして形容詞1語 deutsch「ドイツの」が2語形で8位と18位にランクインしており, 第1号から第5号までのビラと比較して, 実に2～6倍もの内容語が含まれている。

#### 4.4. 語の長さの平均値

文の長さ同様, テキスト中に使用されている語の長さについても計量文献学においては古くから注目されてきている。<sup>46)</sup> 次の表6(次ページ)の最下行は, 「白バラ」の各ビラの総文字数を総語数で割って得られた各ビラにおける1語の平均的な長さ(平均語長)を文字数で示している。

44) Jones/Tschirner (2006:9f.)

45) 参考までに付け加えると, Königのリストでは90位に初めて Zeitという名詞が現れるが, これが上位100位までにランクインした唯一の名詞である。Jones/Tschirnerのリストでは51位に Jahr, 76位に Mal, 90位に Zeitが挙げられている。

46) 村上/土山/金/上阪(2016:61ff.)

表 6. 各ビラの総語数, 総文字数と 1 語の平均的な長さ

	第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号	第 5 号	1～5 号	第 6 号
総語数	419	908	937	789	456	3509	545
総文字数	2334	4891	5421	4167	2656	19469	3308
平均語長	5.57	5.39	5.79	5.28	5.82	5.55	6.07

学生が書いたビラの平均語長が 5 文字台に収まっているのに対し, 第 6 号ビラを書いたフーバー教授は若干長めの語を使用していることがわかる。

#### 4.5. wir, uns, unser- と Ihr, Euch, Euer-: 1・2 人称複数を表す人称代名詞と所有冠詞

本章の最後に, 「ある著者の文章から選び出したその著者の特徴となる単語」である識別語<sup>47)</sup>に注目した調査の結果を示したい。その識別語とは, 使用頻度上位 20 位を示した表 5 の中では, 第 5 号ビラのそれぞれ 14 位と 16 位の Euch 「君たちに・を」<sup>48)</sup> および Ihr 「君たちは」, そして第 6 号ビラの 5 位 uns 「私たちに・を」と 15 位 wir 「私たちは」である。これらの語は他の号のビラでは上位 20 位までには入っていないが, およそ「白バラ」のビラのような政治ビラの目的, すなわち特定の政治的立場の人間が自らの正当性を訴え, まだ自分たちに与していない人たちに同意を促し, 時に特定の行動をとるように仕向ける, という目的を考慮すれば, すべてのビラに同じように頻用されてもおかしくはない。にも拘わらずなぜこれらの語が第 5 号ビラと第 6 号ビラで突出して多く用いられているのか。

これらの語が第 1 号から第 4 号までのビラで 20 位までに入っておらずとも, そもそもどれくらいの頻度で使われているのか, 所有冠詞 unser- 「私たちの」と Euer- 「君たちの」も含めて各ビラでの使用回数をまとめた。次の表 7 および表 8 (いずれも次ページ) はそれぞれ, 前者が 1 人称複数の, そして後者が 2 人称複数の人称代名詞および所有冠詞の使用状況を示している。

まず表 7 からは, 第 1 号から第 5 号までのビラと第 6 号ビラとの間にはっきりとした違いがあることがわかる。どのビラにおいても 1 人称複数の人称代名詞および所有冠詞は用いられているが, その総語数に占める割合が第 6 号ビラにおいては, 第 1 号から第 5 号までの約 3～8

47) 村上 / 土山 / 金 / 上阪 (2016:67ff.)

48) ドイツ語の書簡においては, 2 人称親称の人称代名詞および所有冠詞を大文字で書き始めるという習慣が長らく存在した。「白バラ」のビラでもその習慣に倣ってか, これらが大文字で書き始められている。ちなみに書簡における 2 人称親称の人称代名詞および所有冠詞の大文字書きは現行の正書法規則でも許容されている。Vgl. RfdR (2018:72f.): § 66 E: In Briefen können die Anredepronomen *du* und *ihr* mit ihren Possessivpronomen auch großgeschrieben werden.

表 7. 各ビラにおける 1 人称複数の人称代名詞・所有冠詞 wir, uns, unser- の回数・割合

	第 1 号ビラ	第 2 号ビラ	第 3 号ビラ	第 4 号ビラ	第 5 号ビラ	第 6 号ビラ
wir	1	8	10	8	1	6
uns	2	5	4	0	1	10
unser-	2	1	2	0	1	11
合計	5	14	16	8	3	27
ビラ総語数	419	908	937	789	456	545
割合	1.2%	1.5%	1.7%	1.0%	0.6%	5.0%

倍と著しく高くなっている。第 6 号ビラでは総語数に占める 1 人称複数人稱代名詞・所有冠詞の割合は 5.0% であるが、これは第 6 号ビラにおいては 20 語ごとに 1 回は「我々は・の・に・を」が出てくる、しかもそれが 27 回もあることを意味する。

学生メンバーたちから第 6 号ビラの草案執筆の依頼を受けた 49 歳になるフーバー教授が、学生たちが書いた第 5 号までのビラに目を通し、その調子に倣って、いわば学生になりすまして書いたため、または読者になるであろう学生との距離が縮まるよう、彼らとの一体感を高めようとして書いたがゆえに、無意識に 1 人称複数の人称代名詞・所有冠詞を多用してしまい、第 5 号までのビラと異なり、第 6 号ビラでそれらが際立って多くなってしまった、とは穿った見方であろうか。

表 8. 各ビラにおける 2 人称複数の人称代名詞・所有冠詞 Ihr, Euch, Euer- の回数・割合

	第 1 号ビラ	第 2 号ビラ	第 3 号ビラ	第 4 号ビラ	第 5 号ビラ	第 6 号ビラ
Ihr	1	0	6	0	4	0
Euch	0	0	1	2	4	0
Euer-	0	0	6	1	3	0
合計	1	0	13	3	11	0
ビラ総語数	419	908	937	789	456	545
割合	0.2%	0%	1.3%	0.3%	2.4%	0%

2 人称複数の人称代名詞・所有冠詞の使用状況に関しては、1 人称複数のその場合ほど、学生の書いた第 1 号から第 5 号までのビラと、フーバー教授の書いた第 6 号ビラとの間で目で見て取れるような違いはない。フーバー教授の書いた第 6 号ビラでは皆無であるが、学生たちが書いたビラの中でも、第 2 号ビラでは同様にまったく、第 1 号および第 4 号ビラでもほとんど、2 人称複数の人称代名詞・所有冠詞は使われていない。

ただ、初回のビラの鑑定時、第 5 号ビラと第 6 号ビラの 2 通のみを受け取ったホルダーが本節で取り上げた識別語にも注目していたならば、この両ビラが同一の執筆者によるという推定

にはあるいは至らなかったかもしれない。

## 5. むすびにかえて

本稿第3章で確認した通り、著者不明の文書として「白バラ」のビラを受け取り、それを「人文科学的」に鑑定した古文献学者ハルダーは、その著者の、知識人であり大学関係者であるという属性を概ね正しく推定し得た。その一方で彼は、ハンス・ショルとアレクサンダー・シュモレルという2名の大学生によって書かれた第5号ビラと、心理学・哲学の教授であるクルト・フーバーが書いた第6号ビラとを同一著者によるものとする誤った判断も下している。

これに対し、文章の持つ特徴を数量化して文章の分析を行う計量文献学的手法を援用した本稿第4章の調査では、特に章後半の語レベルの分析、すなわち各ビラにおける使用頻度上位語や、ビラに使用されている語の平均的な長さ、また1人称複数の人称代名詞および所有冠詞の使い方からは、第1号から第5号までのビラと、最後の第6号ビラとの間に明確な違いがあることが明らかとなった。これは計量文献学的な分析方法が、人文諸科学で従来行われている文献調査方法を補ったり、その調査結果を吟味したりできることを示しているものと捉えることができる。

他方で、本稿第4章第1節および第2節で行った文レベルの計量文献学的分析では、第1号から第4号までのビラでは文が共通して著しく長く、またその構造も複雑であるが、第5号および第6号ビラでは平均文長が第1号から第4号ビラまでの半分程度と明らかに短く、その構造もきわめて単純なものが多数を占めることが判明した。すなわち、文レベルにおける計量文献学的調査の結果は、第5号ビラと第6号ビラが同じ特徴を有することを示している点で、ハルダーが下したのと同じ誤った判断に繋がる危うさがある。

「白バラ」のビラ第1号から第4号まではそれぞれわずかに100枚程度が、主としてドイツの知識人階層に郵送された。第1号から第4号までのビラでもって、「白バラ」の学生たちは知識人たちに訴えかけたかったのである。<sup>49)</sup> これに対し、「すべてのドイツ人に呼びかける」<sup>50)</sup>と題された第5号ビラや、「女子学友諸君！男子学友諸君！」で始まる第6号ビラは、そのタイトルや書き出しから明らかな通り、それらが訴えかける対象はもはや知識人だけに限られてはいない。表1に示した通り、第5号および第6号ビラは、第4号ビラから半年以上後に作成・頒布されている。この半年以上の間に、「白バラ」の学生たちは衛生兵として東部戦線に

---

49) 1943年2月20日のゲシュタポの尋問にハンス・ショルは次のように答えている。「私は知識人階層に訴えかけようとしていました。だから主に大学関係者などに向けて書いたのです」。Vgl. Breinersdorfer (Hrsg.)(2006:413): Ich wollte die intelligentere Schicht aufrufen und wandte mich daher hauptsächlich an Akademiker usw.

50) Aufruf an alle Deutsche!



派遣され、その惨状を目の当たりにしている。また第5号・第6号ビラが出される直前の時期、1943年1月末から2月にかけては、東西両戦線でドイツの戦況は圧倒的不利になっており、第4号ビラまでの時期のように、「高邁な」文章でインテリにのみ訴えかけていればいい、という前年までの状況では一少なくとも「白バラ」のメンバーたちにとっては一なくなっていたのである。ここに記したような、文書が作成された時代背景や、誰が誰に語りかけているのか、という語用論的な視点を考慮すれば、前段落に記した危うさは回避できよう。すなわち、人文科学的な調査結果が計量文献学的なそれによって吟味・補足され得るように、その逆もまたあり得るし、必要でもある。

最後に、古文献学者リヒャルト・ハルダーが作成したビラの鑑定書が「犯人」逮捕に貢献することはなかった。彼が2回目のビラ鑑定を終え、その所見を書き上げて提出したまさにその日1943年2月18日に、ハンスとゾフィーのショル兄妹が逮捕され、彼らの住まいの家宅捜索から得られた証拠や、その後の彼らの供述から、「白バラ」の主要メンバー全員が明らかとなったからである。

## 参考文献

- 阿部美規 (2018) : 「『白バラ』のビラを読む. そのテキストの計量的分析」, 日本独文学会北陸支部編『ドイツ語文化圏研究』, 15号, 1 - 21 ページ.
- 財津亘 (2017) : 「犯罪捜査のための心理学」, 日本心理学会編『心理学ワールド』, 73号, 46 ページ.
- シェラット, イヴォンヌ (2015) : 『ヒトラーと哲学者 哲学はナチズムとどう関わったか』, 三ツ木道夫・大久保友博訳, 白水社.
- ショル, インゲ (2016) : 『改訂版 白バラは散らず ドイツの良心 ショル兄妹』, 内垣啓一訳, 未来社.
- 関楠生 (2016) : 『『白バラ』 反ナチ抵抗運動の学生たち』, 清水書院.
- 對馬達雄 (2015) : 『ヒトラーに抵抗した人々 反ナチ市民の勇氣とは何か』, 中公新書.
- テラー, ジェームズ/ショー, ウォーレン (1993) : 『ナチス第三帝国事典』, 吉田八岑監訳, 三交社.
- ブライナー・ドルファー, フレート編 (2007) : 『『白バラ』 尋問調書 『白バラの祈り』 資料集』, 石田勇治・田中美由紀訳, 未来社.
- ベトリ, C. (1971) : 『白バラ抵抗運動の記録 処刑される学生たち』, 関楠生訳, 未来社.
- 村上公子 (2013) : 「『白バラ』 研究の動向」, 日本ドイツ学会編『ドイツ研究』, 47号, 167 - 174 ページ.
- 村上征勝 (2004) : 『シェークスピアは誰ですか? 計量文献学の世界』, 文春新書.
- 村上征勝/土山玄/金明哲/上阪彩香 (2016) : 『計量文献学の射程』, 勉誠社.
- 山下公子 (1988) : 『ミュンヘンの白いばら ヒトラーに抗した若者たち』, 筑摩書房.
- 山下公子 (1997) : 『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』, 講談社選書メチエ.
- 山本尤 (1985) : 『ナチズムと大学 国家権力と学問の自由』, 中公新書.
- Breinersdorfer, Fred (Hrsg.) (2006): Sophie Scholl. Die letzten Tage. Frankfurt am Main.
- Chaussy, Ulrich/Ueberschär, Gerd R. (2013): »Es lebe die Freiheit!« Die Geschichte der Weißen Rose und ihrer Mitglieder in Dokumenten und Berichten. Frankfurt am Main.

- Jones, Randall L./Tschirner, Erwin (2006): A frequency dictionary of German. Core Vocabulary for learners. London/New York.
- Killy, Walter/Vierhaus, Rudolf (2001): Deutsche Biographische Enzyklopädie. Band 4. München.
- König, Werner (1994): dtv-Atlas zur deutschen Sprache. Tafeln und Texte. München.
- RfdR (2018): Deutsche Rechtschreibung. Regeln und Wörterverzeichnis. Mannheim.
- Schneider, Michael C./Süß, Winfried (1993): Keine Volksgenossen. Studentischer Widerstand der Weißen Rose. München.
- Scholl, Inge (2016): Die Weiße Rose. Erweiterte Neuauflage. Frankfurt am Main.
- Schott, Gerhard (2008): Richard Harder, klassischer Philologe, erster Interpret der Flugblätter der »Weißen Rose«, und das »Institut für indogermanische Geistesgeschichte«. In: Die Universität München im Dritten Reich. Aufsätze. Teil II. Hrsg. von Elisabeth Kraus (Beiträge zur Geschichte der Ludwig-Maximilians-Universität München für das Universitätsarchiv herausgegeben von Hans-Michael Körner. Band 4), München (Herbert Utz Verlag), S. 413-500.
- Siefken, Hinrich (Hrsg.) (1994): Die Weiße Rose und ihre Flugblätter. Dokumente, Texte, Lebensbilder, Erläuterungen. Manchester/New York.

